

異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究

Research on the Significance of Mixed-age Grouping in Pre-schools and Pre-school Teachers' Support for the Practice

管 田 貴 子*

Takako KANDA*

要 旨

本研究の目的は、異年齢保育に関する日本と米国の先行研究を概観し、異年齢保育の教育的意義や保育者の援助について検討することである。日本と米国の異年齢保育を比較すると、人員や空間の有効利用を目的とした米国の合同学年 (combined grade) は、同年齢ではクラス編成が不可能なために実施する日本の「混合保育」に近いと考えられた。一方、異年齢集団 (mixed-age grouping) とは、多様な発達段階や経験をもつ子どもがかかわり合うことに教育的意義を見出しており、日本の「縦割り保育」に近い意味合いをもっていた。

一方、相違点として3点挙げられ、米国の研究では(1) 仲間に教えること (peer-tutoring) による年上の子どもの自尊心や知性の発達についても言及しており、(2) 子どもの能力に応じた集団づくりや、個々の子どもの発達に応じたカリキュラムづくりを目指して異年齢集団が用いられ、(3) 異年齢保育を実践する過程における園全体の環境づくりといった保育者への支援についても言及されていた。

キーワード：異年齢保育、保育者、援助

はじめに

我が国の合計出生率は2006年に1.32人¹⁾ となり、少子化の進行にともなって注目されているのが異年齢保育である。日本保育協会 (1997)²⁾ によれば、「基本的に同年齢だが、異年齢混合で保育するときもある」と回答した保育園が72.1%と最も多く、「基本的に異年齢混合だが、同年齢で保育するときもある」の10.1%と、「異年齢混合」で保育をしている5.4%を合わせると、9割近い保育園が異年齢混合の保育を取り入れていると言える。

異年齢保育を実施する目的としては、次の3点が挙げられる。それらは第一に、少子化による子どもたちの社会性や仲間関係の形成にマイナスの影響があるという心配によるもの、第二に少子化により特に過疎地ではやむを得ず導入するもの、第三に少子化の問題とは関係なく、多様な仲間関係の形成や自我の発達にプラスの影響を期待するものである (坪井・山口, 2005)。このように様々な理由から注目される異年齢保育であるが、その先行研究や実践の整理を行っているものはほとんどなく、行われている整理も不十分で

ある (横松ら, 2006)。

米国では、現代の子どもたちが家族や近所の人々と過ごす時間が短く、異年齢の子どもとのかかわりを通して学ぶ機会が少ないことから、就学前施設や学校において異年齢を含めたグループ分け (mixed-age grouping) が支持されている (Katz, Evangelous, & Hartman, 1990)。Katz (2001) は我が国で行った「21世紀への展望」の講演においても、異年齢保育を通して子どもたちが相互に教え、学び合う機会をもつことの重要性を指摘している。このようなことから、米国における異年齢保育に関する研究は、わが国の異年齢保育を考える上で参考になると考える。

よって本研究では、異年齢保育に関する日本と米国の先行研究を概観し、異年齢保育の教育的意義や保育者の援助について検討することを目的とする。

I. 異年齢保育の定義

「異年齢保育」という用語を、辞典や用語集を基に分析した横松ら (2006) は、異年齢の乳幼児たちを対象にした保育を基本的に積極的な意味を込めて「異年

* 弘前大学教育学部学校教育講座 (幼児教育学分野)

Department of School Education (Early Childhood Education), Faculty of Education, Hirosaki University

「異年齢保育」か「異年齢児保育」と総称している。また増田(2007)は、「異年齢保育」を「異なった年齢の子どもたちでクラスを構成する保育形態のこと」と定義づけている。

「異年齢保育」と類似した用語としては、「異年齢児保育」、「縦割り保育」、「混合保育」がある。実施園の導入契機や特別な教育的意義への期待の有無に関わらず、総称として「異年齢保育」か「異年齢児保育」を用い、より積極的な導入では「縦割り保育」、より消極的な導入では「混合保育」を使用する(夏堀, 2007)。ここで積極的とは、異年齢児の相互作用に教育的意義を見いだして実施している場合であり、消極的とは同年齢ではクラス編成が不可能なためにやむを得ず実施する場合を指す。

とくに近年は、仕方なくする異年齢保育から、求めてする異年齢保育へと変化してきていることが指摘される(ききょう保育園・諏訪, 2006)。

II. 異年齢保育の実践報告

異年齢保育の実践で問わなければならないのは、異年齢保育を「どのようにやっているかであり、その内容をどのように深めているかである」(ききょう保育園・諏訪, 2006, 130頁)。国内の異年齢保育の実践報告では、異年齢の子ども同士のかかわりについて、大きく二点のことが言及されている。

まず第一に、異年齢の子ども同士がかかわる場を提供しただけでは、異年齢保育は成立しないことが報告されている。たとえば、従来のクラス別の保育に慣れている5歳児は手をつないで散歩することや、保育者が指示した活動でなければ、3、4歳児と交わることとはほとんどなかったという報告がある(入江ら, 2003)。また、保育者が異年齢でかかわることを期待して、異年齢グループ内でペアを組ませた実践も紹介されている(仲野・後藤, 2002)。しかしこの実践では、年齢による力の差や行動のペースの違いが子どもの負担になってしまうこともあった。

すなわち、異年齢保育の導入では常に「年長児の発達保障」という問題が指摘され、この対応として異年齢保育の実施を1週間あるいは1ヶ月に何回かに限定する園も多い(坪井・山口, 2005)。しかし逆に、異年齢保育の期間を限定したことで、異年齢保育で芽生えた関係性が、元の年齢別クラスに戻ったときに発揮されなかったという課題も述べられている(斎藤, 2006)。

このような「年長児の発達保障」の問題から、国内

では同年齢保育と異年齢保育を併用する園も多く、異年齢保育の時間の設定や活動内容の選定を模索しながら、異年齢保育を実施している状況が見える。

第二に実践報告の中で、保育者が異年齢保育において、年上の子どもと年下の子どもとの間に、「お世話するーお世話される」関係を期待しすぎる傾向が指摘されている(坪井・山口, 2005; 夏堀, 2007)。異年齢保育では、年上・年下の子どもに固定的な役割を当てはめすぎることが課題となっており、双方の子どもにとって教育的意義のある実践となることが望まれる。

III. 異年齢保育の教育的意義

先行研究では、異年齢保育の教育的意義として三点挙げられている。それらは第一に、子ども同士のタテ・ヨコの豊かなかかわりができること、第二に個々の子どもの拠点となる場所や居場所がひろがること、第三に保育者にとって3年をワンサイクルとしてクラス編成することでクラスが安定することである(高田, 2006)。特に年下の子どもは年上の子どもに対してあこがれや目標をもち、逆に年上の子どもは年下の子どもに対して優しく対応することを通して、自信をつけるといった意義が指摘されている(入江ら, 2003; 坪井・山口, 2005; 仲野・後藤, 2002; 脇ら, 2005)。

また、異年齢集団において遊びを学習する過程には、遊びの技能や知識に優れた成熟者の行動モデルに対して、未成熟者が模倣するといった観察学習がある(高橋, 1995)。これは年下の子どものモデリングによる学習であり、年上の子どもが年下の子どもにとっての成長の手本となることを意味する(坪井・山口, 2005; 仲野・後藤, 2002)。このことから、異年齢保育を通して異年齢の子どもが一緒に、同じ作業に取り組むことや、一緒にいるといったこと自体にも、異年齢保育の教育的意義があると考えられる(夏堀, 2007)。

さらに、同年齢の子どもとは友達関係が築きにくい子どもでも、年下の子どもとはスムーズに遊べる場合があることが記されている(坪井・山口, 2005)。このように、年上の子どもにとっての人間関係づくりといった意義も指摘されている。

IV. 米国の異年齢保育の動向

(1) 異年齢保育に関連する用語

米国では異年齢集団(mixed-age [multi-age] grouping)に近い用語として、Katz(1992)が初等教

育にも踏みこみ、異学年集団 (nongraded [ungraded] grouping)、合同学年 (combined grade)、連続的な発達 (continuous progress) などを挙げている。

しかしこれらは、次のようにそれぞれ異なった目標をもつ (Katz, 1992)。まず異学年集団 (nongraded [ungraded] grouping) とは年齢ではなく、子どもの基礎的な能力に応じた同種の集団を形成することを意味する。これは同年齢集団から、ある知識や技術の習得段階にいる子ども集団へと再形成する点を強調している。

また合同学年 (combined grade) とは、小さな学校や子どもの人数の変動が大きい学校において、人員や空間といった資源を最大限に利用するための方法である。よって、子どもの多様性を活かすといった教育的意義は少ない。

さらに、連続的な発達 (continuous progress) では、年齢ごとに期待される発達にとらわれず、個々の子どもの発達や学びに応じた成長を補償することを目標とする。

最後に異年齢集団 (mixed-age [multi-age] grouping) とは、様々な年齢の子ども同士がかかわり、協力することで得られる利点を、最大限に活かそうとする実践である。

このように、これらの実践は異なった目標に向かって行われており、教育的意義や留意点も異なると考えられる。次に、異年齢集団での保育において、期待される教育的意義と留意点を見ていく。

(2) 期待される教育的意義について

異年齢集団は米国に限らずイギリス、スウェーデンなどでも、幼児期から取り入れられており (Katz, Evangelou, & Hartman, 1990)、異年齢保育の教育的意義としては次の三点が挙げられる。

第一に異年齢保育の教育的意義は、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」とつなげて論じられる (Katz, Evangelous, & Hartman, 1990)。ここで「発達の最近接領域」とは、「子どもが今日共同でできることは、明日には独立でできるようになる」といった可能性を意味する (柴田, 2001)。すなわち、ある子どもが異年齢の子どもとのかかわりを通して身につけたことは、一人でできるようになる可能性が示唆される。

第二に、仲間に教えること (peer-tutoring) や協働的な学び (cooperative learning) によって、年上の子どもの自尊心や満足感、社会性を高めることが指摘されている (Aina, 2001; McLain, Heaston, & Kitchens,

1995; Katz, Evangelou, & Hartman, 1990)。たとえば4歳の子どもでも、聞き手の年齢に合わせて、声のトーンや文の長さ、用語を変えて話すと言われている (Katz, 1995)。すなわち、知識や技術が同じ程度であるが、全く同じではない子どもたちは、思考や認知的な発達において相互に刺激を与えるのである (Katz, Evangelous, & Hartman, 1990)。

第三に異年齢保育をすることによって、子どもたちがもつ多様な能力や技術が、保育者によって受けとめられやすくなるといった特徴がある。同年齢集団において保育者は、すべての子どもに対して同じような知識や技術を身につけるように期待するため、子どもたちは大きなプレッシャーを受ける (Katz, 1995)。しかし異年齢集団では、年齢に関係なく個々に応じた発達が認められやすくなり、競争的なふるまいよりも、協力的なふるまいが促されるのである (McLain, Heaston, & Kitchens, 1995)。

(3) 異年齢保育の留意点

異年齢保育において保育者が留意する点としては、以下のようなことが挙げられる。

まず、年上の子どもの負担とならないように保育者が配慮することである。Katz (1995) によれば、保育者は年上の子どもに対し、年下の子どもに絵本を読んであげるように促すとともに、年上の子どもが年下の子どもの対応に困ることがないように、「今は手伝えないけど、これが終わったらすぐ手伝うよ」といった年下の子どもへの意思の伝え方を教える必要があると指摘する。

また、保育者は異年齢保育を実践するうえで、子どもの発達に関する深い知識と、指導計画のレポートをもつことが求められる (Aina, 2001; McLain, Heaston, & Kitchens, 1995; Gaustad, 1995)。そのためにはまず、保育者が異年齢による実践を観察する機会をもち、異年齢で活動を実践した後にフィードバックを受けて、省察し、計画を改めて、再挑戦することが求められる (Gaustad, 1995)。Gaustad によれば、このように教師が異年齢集団での実践に取り組むためには、安心して失敗しながら学んでいける環境を必要とする。なぜならば、教師は異年齢集団での実践経験が少ないため、失敗してもよいと思える環境がなければ、慣れている同年齢集団での実践へと逆戻りしてしまうことが危惧されるからである (Gaustad, 1995)。

これらのことから、同年齢集団から異年齢集団での実践へと移行するには、保育者が異年齢集団にふさわ

しい活動を計画し、継続的に改善していくことが必要となる。そして、このような保育者の学びを支援する園全体の取り組みがなければ、異年齢保育を実践していくことは難しいのである。

おわりに 一米国と日本の異年齢保育の比較一

米国の先行研究において、合同学年 (combined grade) とは人員や空間の有効利用を目的としており、同年齢ではクラス編成が不可能なために実施する日本の「混合保育」に近いと考えられる。一方、異年齢集団 (mixed-age [multi-age] grouping) とは、多様な発達段階や経験をもつ子どもがかかわり合うことに教育的意義を見出している点で、日本の「縦割り保育」に近い意味合いをもつと言える。また、我が国の先行研究では異年齢保育の意義として、年下の子どもによる観察学習やモデリングが挙げられており、これは米国の研究において「発達の最近接領域」として指摘された教育的意義に似た意味合いをもつと考えられる。

しかし、異年齢保育に関する日本と米国の先行研究では、次のような相違点が見られた。

第一に、米国の研究では、異年齢保育を通して年上の子どもが年下の子どもをお世話することに留まらず、仲間に教えること (peer-tutoring) を通した年上の子どもの自尊心や知性の発達についても言及されていた。わが国では、保育者が「お世話する—お世話される」といった固定的な役割を期待しすぎる傾向にあり、子どもたちにとって負担となることが指摘されている。よって、子どもの社会性の発達だけではない異年齢保育の教育的な意義について、さらに検討することが求められる。米国では年上の子どもの負担とならないよう、保育者が年上の子どもに年下の子どもへの具体的な声かけの仕方を伝授するといった留意点も挙げている。これは、わが国の実践において、年上の子どもの発達保障を考える上でも参考となる。

第二に、米国において異年齢集団は、子どもの能力に応じた集団づくりや、個々の子どもの発達に応じたカリキュラムづくりを目指して用いられていた。わが国の異年齢保育に関する研究では、個々がもつ能力の伸長という意味合いについて論じたものは少ない。すなわち日本の異年齢保育は、年齢という枠を維持することで子どもを平等に保育することを大切にしながら、実施されている可能性が推察される。

第三に、米国では異年齢保育を実践する過程において、保育者が失敗しながらも学んでいける園全体の環境の設定や、保育者が専門性を高めるための時間と機

会の補償といった保育者への支援についても言及されていた (Gaustad, 1995)。異年齢保育の実践において保育者は、保育目標の設定や、クラス意識の涵養、異年齢による発達阻害などの問題に対応しなければならない (脇ら, 2005)。わが国の現状として、児童館や学童保育においても、異年齢集団の指導が重要な課題となっているが、異年齢集団に関する基礎知識や理論を学習する機会は充分ではないと指摘される (川上ら, 2004)。だからこそ、異年齢保育を実践する保育者を、園全体で支援していくような体制が求められる。

今後の課題としては、異年齢保育の実践を観察することにより、教育的意義を明らかにするとともに、異年齢保育の実践で求められる保育者の専門性についても検討したい。

注

- 1) 厚生労働省「平成18年人口動態統計月報年計 (概数) の概況」による。
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai06/kekka2.html#2>
- 2) 日本保育協会 (1997)「保育所の保育内容の実態に関する調査研究報告書」による。
http://www.nippo.or.jp/cyosa/11/11_ta.htm

参考文献

- Aina, E. O., "Maximizing Learning in Early Childhood Multiage Classrooms: Child, Teacher, and Parent Perceptions", *Early Childhood Education Journal*, 28 (4), 2001, pp.219-224.
- 荒井洌・福岡貞子『異年齢児の保育カリキュラム—たてわり保育の指導計画と実践例』ひかりのくに、2003年。
- Gaustad, J., *Implementing the Multiage Classroom*, ERIC Digest. Eugene, OR:ERIC Clearinghouse on Educational Management, 1995.
- 入江礼子・内藤知美・太田佐恵子・井上紀子・杉崎友紀・黒川愛・上田陽子・塩原紀子「異年齢交流を支えるティーム保育の検討—指導計画の変容を手がかりとして—」『鎌倉女子大学紀要』第10号、2003年、11-19頁。
- Katz, L. G., Evangelou, D., & Hartman, A. J., *The Case for Mixed-Age Grouping in Early Education*, Washington, D.C.: NAEYC, 1990.
- Katz, L. G., *Nongraded and Mixed-Age Grouping in Early Childhood Programs*, ERIC Digest. Champaign, IL: ERIC Clearinghouse on Elementary and Early Childhood Education, 1992.
- Katz, L. G., *The Benefits of Mixed-Age Grouping*, ERIC

- Digest. Champaign, IL: ERIC Clearinghouse on Elementary and Early Childhood Education, 1995.
- Katz, L. G., Vision for the 21st Century: A Developmental Approach to Early Childhood Education. 『乳幼児教育学研究』第10号、2001年、81-86頁。
- 川上琴美・中込まゆみ・藤原千恵美・赤井住郎「野外活動の指導と援助4－異年齢集団の指導実践を通して－」『日本保育学会第57回大会発表論文集』2004年、858-859頁。
- ききょう保育園・諏訪きぬ『ききょう保育園の異年齢保育－かかわりが確かな力を育てる－』新読書社、2006年。
- 増田まゆみ「異年齢保育」谷田貝公昭監修『保育用語辞典 第2版』一藝社、2007年、21-22頁。
- McLain, K. V. M., Heaston, A., & Kitchens, T., “A Multiage-Grouping Success Story”, *Early Childhood Education Journal*, 23 (2), 1995, pp.85-88.
- 仲野悦子・後藤永子「異年齢児とのかかわり－いたわりと思いやりの心の育ち－」『保育学研究』第40巻第2号、2002年、72-80頁。
- 夏堀陸「正統的周辺参加論の視点による異年齢保育の効用」『富士常葉大学研究紀要』第7号、2007年、171-184頁。
- 齋藤孝子『異年齢保育への移行』をめぐって』『教育』第56巻第10号、2006年、84-88頁。
- 塩路晶子・佐々木宏子「異年齢交流の視点から見た乳幼児保育」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第20巻、2005年、103-111頁。
- 高田清「異年齢保育という方法技術と仲間づくり」『季刊保育問題研究』219号、2006年、81-89頁。
- 高橋健介「子どもの遊びの学習に対する大人の教育関係構築の可能性－異年齢集団における遊びの学習過程をてがかりにして－」『松山東雲短期大学研究論集』第26巻、1995年、107-118頁。
- 坪井敏純・山口郁「異年齢保育の中の子どもたち」『南九州地域科学研究所所報』第21巻、2005年、1-10頁。
- ヴィゴツキー（柴田義松訳）『思考と言語（新訳版）』新読書社、2001年、302頁。
- 脇信明・麻生啓一・伊藤由美子・原田美穂・無着下瑩子・堀尾知弘・甲斐由佳里・沖本薫・原美里・小林いつか「異年齢保育における子どもの発達に関する考察－ひめやま幼稚園における実践をもとに－」『別府溝部学園短期大学紀要』第25号、2005年、17-24頁。
- 横松友義・安達保雄・伊勢慎・永原慎太郎・稲益かおり「異年齢保育に関する体系的研究の重要性」『岡山大学教育学部研究集録』第132号、2006年、69-76頁。
(2008. 7. 18 受理)